

“生きる力”は遊びから

～こどもたちの笑顔のために～

第3回 大人の役割は見守ること



中川 奈緒美 (なかがわ なおみ)

「NPO法人あそびっこネットワーク」代表。
「プレーパーク」「おひさまびよびよ」「練馬区立こどもの森」など、練馬区内7か所の公園で、乳幼児の親子や子どもたちが自由にのびのびと遊べる“あそび場”を運営している。<http://asobikkonet.com/>



やのちん

できるかできないかわからないことには手を出さず、「そんなこと無理だよ～。俺はいいよ～」とよく言う。そんな子が、あまり得意じゃない木登りを始めた。一つ一つの動きが慎重でゆっくり。時折「ちょっと怖いな。いけるかな?」とつぶやいて、下にいる僕をちらっと見るので、「大丈夫だよ」とつぶやき返すと、彼はまた次の枝に手を伸ばす。降りるも登るも自分次第。頼りになるのは、自分の身体と感覚のみ。人から「ここに足かけて」などと教えてもらっても意味がない。手や足をかける場所を決めてグッと力を入れ、「いけるか?」を確かめる。「いく!」と決めた時にしか体は持ち上がらない。ギリギリのライン、その境界に触れている緊張感。木登りは、今の自分の限界を把握しながら越えていく遊びだ。子どもは、遊びながら自分で自分を育てていく。僕の仕事は、子どもたちが遊ぶ側にいて彼らの育ちをていねいに見守ることだ。

イラスト：五十畑良子



この文章は、「光が丘プレーパーク」のスタッフ、矢野勇樹さんが書いたものです。

昔は、異年齢の子どもたちが近所の空き地等に集まってワイワイと自由に遊んでいました。そんな環境では、木登りのような遊び

は誰でもいつの間にか体験できたことでしょう。しかし今、空き地はありません。公園は自然保護の面から木登り禁止。また、高い所から落ちてケガをしないよう、「木に登らないで」と声をかける親も少なくありません。都会で育つ子どもたちの“遊び体験の貧困化”が心配です。

あそび場のスタッフは「プレイワーカー」と呼ばれていません。まだ日本では珍しい専門職ですが、日本より早く、子どもの遊び環境の悪化に対応を始めた欧米では、多くの施設でプレイワーカーが働いています。プレイワーカーは遊びの指導はしません。子どもが遊びながら様々な人と関わり、地域の自然を感じ、自分で自分を育てることができる環境をつくるのが仕事です。何をやるわけでも言うわけでもなく、子どもが登っている木の下にいる…というのも、遊び環境づくりのひとつ。

地域の大人の方々が、子どもたちをプレイワーカーのように見守ってくださったら、練馬の子どもたちのあそび体験の貧困化は一気に解消されるのではないのでしょうか。